

令和7年2月27日

石巻専修大学  
学長 尾池 守 様

石巻専修大学 自己点検・評価に関する  
「外部評価委員会」 委員長 佐藤 幹男



## 石巻専修大学に対する外部評価委員会報告書

### はじめに

令和6年12月12日(木)午前10時より、本館会議室1において、令和6年度石巻専修大学自己点検・評価に関する「外部評価委員会」が開催された。外部評価委員は、加藤美紀仙台白百合女子大学長、須田一憲石巻地区高等学校長協会会長(石巻高等学校長)、佐藤幹男石巻専修大学元人間学部教授、齋藤正美石巻市長、明石圭生石巻信用金庫理事長、阿部孝浩株式会社アイ・ケー・エス営業部次長、の6名であるが、当日は、齋藤委員、明石委員、阿部委員の3名は所用により欠席、残り3名の委員の出席での開催となった。なお、欠席した委員からは書面による講評が提出され、議事の中で紹介された。大学側の出席者は尾池学長、今関常務の他、自己点検・評価運営委員会、入試、教務の各委員長、さらに理工、経営、人間の各学部長の他、2研究科長、そして事務部の責任ある立場の方々が出席されて開催された。

議事は、①石巻専修大学の令和5年度における自己点検・評価の取り組み及び令和6年度活動方針について、②令和5年度及び6年度前半の活動状況について、③自己点検・評価項目について、の順で、それぞれ各委員から意見を頂き、その後、講評に移った。

当日は、限られた時間ではあったが、広範かつ貴重な意見が多く出された。

当日の論点は、概ね(1)学生支援、(2)地域連携、の2点に整理できる。この2点は、当日紹介された令和6年12月策定の「石巻専修大学 第2次中長期ビジョン(2025~2029)」の中の重要な目標ともされており、それとも関連づけて、論点を絞って簡潔に紹介させていただくこととする。なお、「第2次中長期ビジョン」は、2020年度から2024年度までの第1次中長期ビジョンの後継として、将来の社会変化を念頭に置き、今後の大学のあるべき姿について描き直すとともに、石巻圏域を支える唯一の高等教育機関としての永続性を担保するという観点から策定されたこととされ、第1次中長期ビジョンのブランドスローガンである「地域に根ざして世界に尖った大学」を継承しつつ、「学生を基本に据えた大学づくり(学生第一主義)」と

「社会から真に評価される大学への転換」の両輪をサブスローガンに盛り込み、7つの行動目標と行動計画が示されている。

### (1) 「学生支援」

第一の論点は「学生支援」である。

第2次中長期ビジョンにおいて、最初の行動目標として取り上げられているのが「学生支援の強化による学生生活動実績の向上」である。そこでは、「石巻専修大学は、学生の大切な未来を約束していくため、“活気あるキャンパスづくり”に向けた諸施策を推進していくとともに、学生一人ひとりの納得度の高い進路選択の実現を目指し、さらに、強化指定サークル（硬式野球部、弓道部、女子競走部、サッカー部等）の活動実績の向上を図ることにより、スポーツを通じた学生交流の活性化を図る。」とされている。そして、そのための《行動計画》として、①基礎学力の向上に資する取り組みの推進、②学生の納得度の高い進路選択の実現、③活気に満ち溢れたキャンパスづくりに資する学生生活動の活性化、が掲げられている。

これらの目標、計画は、当然ながら、従来から取り組んできた実践についての点検、評価を基礎に、さらなる飛躍を図るため、より具体的に今後の方向性を検討し、設定したものと推定され、その意味でも、その実現を強く期待するものである。

当日は、学生支援の重要な側面である本学のこれまでの学修支援に関する取り組みについて質問があり、意見も出された。まず、①の「基礎学力問題」については、リメディアル教育への取り組みとその効果などについて質問があり、それについては、出席した各学部の担当者から、各学部の取り組み、例えば、退学抑制と初年次教育の充実を図るための入学前教育の見直し、ラーニング・コモンズの整備に向けた検討と準備等について丁寧な説明があり、さらには、学生保健支援センター（令和4年4月設置）の活動と「障がい学生サポートブック」の作成（令和6年12月）等の取り組みなどが紹介された。今後のさらなる取り組みに期待したいところである。②の学生の進路選択については、就職希望者における高い就職率（99.3% 令和5年度）が示す通り、大きく評価できる点である。なお、③の「活気に満ち溢れたキャンパスづくりに資する学生生活動の活性化」は、収容定員充足との関係からも、今後、さらなる取り組みの強化を望みたい。

### (2) 「地域連携」

第二の論点は、「地域連携」である。

当日、最も、委員の関心の高かった課題が、「地域連携」に関わる大学のこれからのあり方についてであった。



前年度の外部評価委員会と同様に、本学の地域の高校への支援活動、「探究学習」への協力、あるいは地域の課題解決への対応など、地域に根ざした大学としての取り組みに対する評価は高かった。また、昨年度の「地域連携支援係」の設置以降、石巻のみならず、登米市、大崎市へも活動範囲が広がり、市町村教育行政関係者、学校教育関係者との情報交換、交流が進んでいることも評価された。さらには、「地域に根ざした大学」として地域の行政機関や地域企業との連携、交流はもとより重要であるが、「地域の大学と地域企業は運命共同体であり、さらに一步踏み込み、大学が生み出す知識や技術そして人材と、地域と地域企業の魅力をお互い知り合う接点を拡大すべき」で、「地方大学には、地域ならではの人材を育成し定着させる、そして地域経済を支える基盤となることも大きな使命の一つ」といった意見もあった。さらに、「地域における産業振興及び事業の発展成長の支援活動」は、圏域と大学の共存と発展に大いに寄与するので、引き続き積極的な取り組みを期待したいとの意見や「地域と大学との共同研究」といったニュースが流れるとうれしいといった意見もあった他、積極的な情報発信、子ども達への積極的な啓発活動の企画、展開を望む等の要望も出された。

この点で、第2次中長期ビジョンの二つ目の行動目標に、「地域連携による社会実装と地域教育の強化」が設定され、「地域社会との連携・共生を重視し、地域に愛される大学づくりをめざす」とされている。そのためには「学生を主人公に位置づけて、地域連携による社会実装と地域教育の強化を推進していくことが何よりも重要」であり、さらに「SDGsの理念を踏まえた持続可能な社会の創り手を育成する観点から、学生自らが石巻圏域の諸課題解決に積極的に取り組み、持続可能な社会を維持・発展させていくための経験を重ねていく仕組みを整備」し、さらに「教員の研究活動が地域社会に還元されることにより地域社会の課題を解決し、新たな価値を創造する仕組みも構築」するとしている。これらの点で、これからの地域における大学の役割は十分に認識されており、今後の大学づくりに生かされていくことを期待したい。

また、第2次中長期ビジョンの行動目標③には、大学が標榜している“ISHINOMAKI IS CAMPUS”を大学組織レベルで体現し、都市部にはない本学ならではの魅力で社会からの評価を確かなものにするために、カリキュラム全体を貫く《社会実践教育》の全学的な拡充を目指すとしている。「地域」を生かす実践目標として評価したい。

### (3) おわりに

現在の本学にとって最大の課題は収容定員の充足であることは論をまたない。しかし、昨年、外部評価を実施した時点と、現在とでは、本学を取り巻く情勢に大き

な変化はない。むしろ、厳しさを増しているといってもよい。もちろん、それは本学だけの問題ではない。「少子化」を背景とした地方の私立大学（特に小規模校）の定員割れが進む傾向に対して、文科省は撤退や縮小に誘導しようと、「北風と太陽」政策を進めている。その中で、どう生き残るか。

昨年も報告書で触れたが、収容定員の充足に有効な特効薬はない。対応策として考えるべきは地道な努力以外にない。「学生第一」で「地域に根ざす大学」としてどう進むべきか。石巻に本学がなくなったらどうなるのか。石巻に大学がなくてもいいのか。石巻になくてはならない大学をつくる。そうした観点から、さらなる検討、努力をお願いする他にない。

最後に、本委員会に参加された外部評価委員各位、学長、石巻担当常務理事を始め学内諸委員会を代表して出席された教員各位の協力を感謝するとともに、委員会開催に向けて尽力された事務部職員各位に謝意を表す。